

はじめに

『新村出全集』⁽¹⁾第十五巻が短歌篇・書簡篇で構成され、その短歌篇の解説を担当した歌人土岐善麿が、最晩年の十年だけでも数万首にのぼると記しているように、新村出にとって短歌とは、彼の生涯を物語るものであるとしても過言ではないだろう。新村自身「私が歌を学びはじめたのは、早くて十五、六歳か、静岡中学の上級生のころであった⁽²⁾」とし、「近年は、ほとんど学を廃して、歌ばかり詠んでたのしみ、多作即駄作などと駄洒落れ、清濁あわせ呑むと弁解して、詠草の冊子がいよいよふえる⁽³⁾」とあることから、その肩書に「歌人」の称を冠してもよいほど、彼の人生には常に短歌が寄り添っている。歌学初年の頃を振り返り、「正岡子規の短歌革新の旗揚げよりもはるか以前の事に属するから、すべては論外の沙汰であった⁽⁴⁾」と述べているのも、あながち謙辞とばかりも言えず、歌道に対する自負がうかがえる。「私の歌歴自叙」と題された雑誌連載には、新村の歌歴が十五回にわたり披露されているのである。

このように、新村出と短歌について記すことは、量的にも質的にもとうてい筆の及ぶところではないが、校歌をめぐるここ一、二年の考察中、新村出記念財団において見出した葉書・書簡に認められた短歌について、一考を書き起こすことにした。新村出自筆卒業賀歌と同様、いわば嗟嗚野高校にまつわるものと感じられたからである。そしてまた、この項が新村出と短歌という一つの真実に迫る帰納の一端となれば、筆者として幸いこれに過ぎたるはない。

取り上げるのは、一枚の葉書と一通の書状である。前者は、昭和三十一年⁽⁵⁾三月二十二日に新村出から民俗学者柳田國男に送られたもので、文面の最後に連作の短歌五首が宛名面下部に至るまで書き込まれている⁽⁶⁾。後者は、大正十五年一月十六日に東洋学者内藤湖南（虎次郎）から新村出にあてたもので、やはり最後に五首の連作短歌が記されている⁽⁷⁾。湖南の短歌は、書中「いろ／＼御歌ども御示し下され拝誦」とあるように、新村から送られた短歌に触発されたものと思われる。特筆すべきは、いずれの文面も、偉大な学者が取り交わしたものであるという先入観を打ち破る、ユーモアあふれる洒落た内容となっていることである。また、この二者は意外なところに共通点を有しているのだが、これについても言及してみたい。いずれにしても、新村出の人物像を探るに当たっては、やはり短歌を第一に取り上げるべきものと考えているのである。なお、新村出に関する記述のうち、特段の記載なきものは、『新村出全集索引』所収「年譜」記事によるものである。また、拙稿が引用括弧と注の頻出により、煩瑣極まりない様相を呈することについても、あらかじめ読者諸賢の諒解を願っておきたい。文体は随筆的評論の体裁を取りながらも、その内容を裏付ける客観的根拠を『全集』をはじめとする著作に求めることにより、本稿が新村自身の言動を丹念かつ忠実に踏まえた成果であることを示すためである。

1. 新村出へ内藤湖南からの短歌

湖南、内藤虎次郎は周知の通り戦前を代表する東洋学者である。新村出との直接的関係は、明治四十年の京都帝国大学文科大学開設時、ともに教官として任に当たったことに始まる。湖南は教授格の講師、新村は助教授であった。この、湖南の教授招聘に関して新村は、「西からは東洋史の内藤湖南を、東からは国文学の幸田露伴を、それぞれ具眼の達識者が、破天荒にも民間の遺賢を抜擢した⁽⁸⁾」と後年述べており、「破天荒」が肯定的かつ賞賛的用字であることは、任用直後に留学したベルリンでの一エピソード「東大の一友僚助教授に向って、柳村を京大に取り得た感喜のあまり、空寛が、東京大学さまを見る、とビイル機嫌で絵葉書をかいた⁽⁹⁾」ことによっても了解される。京大の自由かつ反東大精神が創立由来のものと考えられる記事である。新村は、任用前年の秋に言語学研究のため二年間の英仏独留学を命じられており、明治四十年三月に出国、四十二年四月に帰国し、翌月教授へ昇任するとともに言語学講座を担当した。一方の湖南も、東洋史講座を担当しつつ同年に教授となっている。昭和三年三月の天平文化記念講演会では、湖南が漢文学、新村が国語学の視点から揃って講話もしている。新村にとって、湖南は同期同格の同輩ということになるが、常に兄事の姿勢を貫いた。これは、湖南が新村より十歳年上であったということに加え、すでに雑誌・新聞記者として名を馳せ、著述や研究論文なども多数著していたことによる。新村自身、大学生当時に湖南の『近世文学史論』に接し、「簡潔なる筆致を以て史論を進めていつた此著を愛読することが多大であつた⁽¹⁰⁾」と回想している。また、資料渉猟に際しては、「書物の蒐集や購入や掘出しや謄写や影印や、すべて書物に関する何等かの事ならば、故人と私との間にでも、故人と京都大学との間にでも、語るべきものが非常に多い。今枚挙に遑がない程である⁽¹¹⁾」と厚恩を感じており、前述した文科大学言語学研究室の新設に当たっても、「満蒙語学の支那側の材料を相当多く備附けることの出来たのは全く博士のおかげと申してよいのである⁽¹²⁾」と記している。学究に関しても、「金沢文庫に訪書したりしたやうなこと、幾多の思出があるが、それら同行の際には後学として益を受けたことが常に多大であつた⁽¹³⁾」と語っている。さらに、自著あるいは刊行本の題簽を依頼もしており、「惜しいことには私は書簡類を除き博士の名筆を請ひ受けておかなかつた。然し、私の旧著たる『南蠻広記』及び『海表叢書』には、翁の題簽を乞うて飾ることを得たのを大幸とした⁽¹⁴⁾」とある通りである。

ここにはまた、湖南が書家としても著名であったことが見て取れる。実際、『書と人』⁽¹⁵⁾において、日本は聖武天皇から高村光太郎まで、中国は王羲之から呉昌碩まで、総勢五十九人の中の一人として内藤湖南が取り上げられていることから、書家中一大家として名を残すほどの人物としてよい。膨大な漢詩文を中心とする墨跡を残した書家、その内藤湖南の項を前掲書において執筆担当したのが、他ならぬ新村出だったのである。そこには、湖南の書として「盛京故宮」と題された七言絶句が掲載されている。中国遼寧省瀋陽に残る清朝の離宮、すなわち後金の二人の皇帝ヌルハチ、ホンタイジの皇居を訪れたときの作である。これに対し新村は、「雄渾にして而も温厚たる筆致を示すとともに、意気の高邁のうちに、秋気の凄然たるを感ぜしめ⁽¹⁶⁾」と評しているが、「当年以来、一時敦煌学派なるものの頭領分たりし湖南翁を景せしめずにはおかない⁽¹⁷⁾」と締めくくっているのは、やはり湖南の本質を、気鋭の東洋学者にあったと見ていることになる。冒頭の紹介文が、「野に遺賢ありとか、雌伏とか、古風な表現があるが、それが最も適切に当たるのは、当

時日露役直後の東洋学振興の新機運において大阪朝日の学芸部から抜擢されて、新設の京大文科の教壇に入った内藤湖南の場合である⁽¹⁸⁾」で始まることから、それは明らかであろう。前述の通り、この「破天荒」人事を終生称揚していたことがうかがえる。新村は続けて、「更に少壯有為の及門者たる羽田亨学士や富岡桃華講師たちを伴って、奉天を経て北京に乗り込み⁽¹⁹⁾」と、一大史料渉猟の盛時を追懐している。この奉天行きの際、湖南は新村へ葉書を送っており⁽²⁰⁾、内藤虎次郎と富岡謙蔵と自署のある二人が、曹廷杰（清末民初の地理学者）を挟んで写真に収まっているのである（羽田亨が撮影者か）。これに先立つ四月二十六日消印の絵葉書では、表面下部に「五體清文鑑は如何にスベキカ来月廿日迄居るつもりなれば出来る見込」と湖南の書き付けがあり、新村自身「博士が奉天で羽田博士と共に撮影して帰られた『五体清文鑑』を一部言語学研究室に収めることを得たのは、むろん博士の賜物として感謝せねばならぬ⁽²¹⁾」と述べていることと符合して、湖南と新村二人の学術的ならびに個人的親交の深さが見て取れる。『書と人』の記事を新村が引き受けたのも、至極当然のことであつたと言えよう。

さて、内藤湖南の書簡は、地に百合の花を描いた折紙四枚に、前半二枚は自身の消息と新村への見舞い、後半二枚は見舞いの短歌が書かれたものである。流麗で配置も見事な文字は美しく、まさに芸術としての書である。公になっている湖南の書は漢詩文がほとんどであるから、その意味からもこの書簡は希少価値を有していると言えよう。書かれた日付は一月十六日夜と明記してあるが、何年なのかは不明で、消印も薄くまったく読みとれない。そこで、いつの年の書簡であったかを確定するところから始めなければならない。

まず、差出人の住所が「市内田中野神町」となっているところから、昭和二年以前であることがわかる。同年八月より湖南は、府下相楽郡瓶原村恭仁山荘に隠棲するからである。これは、「我等事大正十三年より京都府下相楽郡瓶原村に書庫並に書齋建築致候處已に大學も退隱致候故追々その方へ本宅經營致度⁽²²⁾」とあるもので、書簡冒頭に「新年早々瓶の原の新室へまかるなど致候為」とあるのも、そのことを指している。次に、書簡中「学士院会員仰付られ候事身にあはぬ榮譽」と、大正十五年一月帝国学士院会員選出の事実が踏まえられていることにより、この書簡は、大正十五年一月に認められたとするのが妥当である。前年一月は湖南が欧州出張中であり、大正十三年一月まで遡って選出内定があつたとするのは無理がある。また、大正十五年五月には湖南の還暦祝賀会が催され、新村が祝辞を述べているので、昭和二年に至って初めて学士院会員のことに触れるのでは、あまりにも時機を逸しているからである。新村が「御病中よりわざ／＼の御文」を送ったのも、学士院会員選出をいち早く祝すためと思われる。加えて、新村の木水彌三郎宛大正十五年二月五日付の書面に、「少々念入りの風邪のため永らく静養、昨日やうやく軽快をおぼえ候始末に候。旧臘病中頂戴の雉子ありがたく風味仕候、御芳情奉謝候⁽²³⁾」とあることを考え合わせると、湖南が「舊臘以来御引籠にていまにはか／＼しく御はしまさぬよし」と新村に返したのは、やはり大正十五年の一月十六日夜と見るべきなのである。

では、書中の短歌五首について順に解説を加える。すでに述べたように、新村への見舞いに短歌を配したのは、新村からの書簡に種々の歌が示されていたことによる。ちなみに、『内藤湖南全集』第十四卷所収「書簡」中、短歌が記されているものは五通であり（漢詩は二十通）、五首以上の連作も大正十三年渡欧中の二通に見えるのみである。すなわち、新村の短歌が湖南の短歌の呼び水となったわけである。新村は、「とにかく気が進

むのは、旅行とか、哀愁とか、愛情とか、平常心から多少たりとも超越し分離し開放される心境において、一段一段振興し発展することは、凡下の私にも自覚される⁽²⁴⁾」と語っており、二人の歌心には響き合うものがあつたのだろう。湖南書中「此頃健康の小生にはとんと名歌うかび不申候へども」とある文面は、健康自慢ましてや病身擲揄などではなく、心の通い合う歌人同士においてのみ許された、洒落の極みとも言うべき表現なのである。

つまごめに八重垣つくる北の辺のきみが新室うつくしきかも

(釈：妻と暮らすため嚴重に作った京の北辺にあるあなたの新造部屋は愛らしいことだよ)

第一首は、『古事記』上巻に見える須佐之男命の歌「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」を思い起こさせる。八岐大蛇の生贄から救った櫛名田比売を妻として迎え、宮を造営するに際して詠んだとされるもので、『古今和歌集』「仮名序」にも、「すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともじはよみける」と記され、短歌の起源と見なされてきた歌でもある。これを用いたのは、大正十二年十二月、新村が終の棲家とした北区小山中溝町の居宅（先住の鴨川西畔土手町木戸侯旧邸を移築したもの）が完成を見て移り住んだことを、湖南自身の瓶原新居建築も踏まえ、連作第一首の格式を以て表現したからである。加えて、この歌が新村の愛妻家としての一面を描出していることは、上記の伝説とともに、室が妻という意味を合わせ持つことから明らかである。「うつくしきかも」の詠嘆が、新居に対してとするにはいささか表面的であり、これも新室とそこに住む愛妻をイメージしての形容語と考えられる。北の辺の新室に北の方の意を利かせたと解釈しても、恣意的ではないだろう。愛らしいと訳出したのはそのためである。

くはずとも高楊子かむますらはすきもる風をあにおそれめや

(釈：食わねど高楊枝の男子たるものはすきま風を恐れようかいや恐れるはずがない)

第二首、冒頭にことわざをもってきたところがまず面白い。「武士は食わねど高楊枝」と言うと、瘦せ我慢のように負の評価を背景とするものと感じられるが、これは、このことわざが天明年間前後に生まれた『上方いろはかるた』に取り入れられ⁽²⁵⁾、その絵柄も困惑した表情の武士を描いており、皮肉な表現と読み取られるようになったからである。『上方いろは』には、このほかにも「論語読みの論語知らず⁽²⁶⁾」「下手の長談義⁽²⁷⁾」「論言汗の如し⁽²⁸⁾」という具合に、儒学者や談義僧、権力者を風刺している類があり、上方町人の冷徹な目が光っているように思われる。しかし、もともとの意味は、『広辞苑』第五版に「武士の清貧に安んずること、気位の高いことにいう」とある通り、正の評価を有している。高楊枝のたかと頭韻を踏んで、「鷹は飢えても穂はつまず」という、『仮名手本忠臣蔵』五段目にも引かれていることわざと組になって使われてもいたし、『伽羅先代萩』で千松が「腹がへってもひもじゅうない」と、侍の子であることを誇りに言うところは、人口に膾炙したものでもあつた。この短歌においても、その武士気質を高らかに宣言している。湖南の内藤家が南部藩士族であり、新村出の実父関口隆吉、養父新村猛雄がともに旗本であつたという、武家の出自を踏まえている可能性もある。「元来は旧徳川幕臣の系統の末流を汲んでそだった江戸っ子の片割れたる自分⁽²⁹⁾」と後年回想する新村とは、旧幕府側すなわち敗者の不屈精神を備えた同志として、肝胆相照らすものがあつたのではなかろうか。「あに～めや（も）」は反語で、恐れはしないという強調になる。後年、「私

が冬ぎらいなことは知人の間でよく知られているが⁽³⁰⁾」と書いている新村にとって、寒中京都北辺の底冷えに北山おろしは、罹病中の身にとりわけ耐え難かったであろうが、それを、居丈高に圧するのではなく、矜持を高くと諺の振りでおどけてみせた詠みぶりに、新村は心中微笑むとともに温かみを感じたに違いない。

ゴシックぶりのいかしみてらもちぎ高き八ひろどのにはあにしかめやも

(釈：ゴシック風の厳かな教会も千木の高い広い神殿に及ぼうかいや及ぶはずがない)

第三首から最後の第五首までは、同一趣向の上に成っている。すなわち、新村出がキリシタン文献の研究に携わっていた事実に基づいて詠まれた歌である。この書簡が記された前年、大正十四年の五月に、新村は京大に行啓した皇太子に対し、吉利支丹遺物八品目について説明している。キリシタン学における第一人者として認められていたということになる。研究者としてのスタートは、「私は明治三十二年七月に東大を出て大学院に入学した時に、研究の題目を「国語学」として届けて、主任教授の上田万年先生は、それをよかろうと言って受理されました⁽³¹⁾」とある通りだが、「明治四十二年の初夏、私が天草本の『平家物語』や『伊曾保物語』を英国から謄写して帰つて同好の上田柳村博士と京都で落合つたとき、さあこれから南蠻学を大に興さうではありませんかと話しあつたことがある⁽³²⁾」という記述に着目したい。この明治四十二年は、先に記したとおり、新村が二年に及ぶ英仏独留学から帰国し、新設京都帝国大学文科大学教授として言語学講座を担当した年である。つまり、新村は日本におけるキリシタン学の創始者であり、キリシタン学は京大教授新村出の主たる研究対象であったという事実である。実際、『全集』十五巻のうち言語研究篇四巻分に対し南蠻紅毛篇は三巻分を占めている。また、その業績を単行本の刊行から探ると、大正十五年までに国語読本・文典関係が十点あるのに対し、キリシタン学関係は七点と拮抗している。しかも、大正十三年から十五年にかけ、『南蠻更紗』『南蠻広記』『続南蠻広記』『南蠻更紗(改訂版)』と立て続けに出版されていることは、大正末年当時、新村の専門がキリシタン学にあったと見て問題ないであろう。「大正のおわりごろから昭和のはじめにかけて、新村出先生の「南蠻更紗」「南蠻広記」が広く読まれ、静かなブームをまき起したことがある⁽³³⁾」との記事もあり、湖南が新村に対し、キリシタンに関わる文物を用いて歌を詠んだのは、ごく自然なことだったのである。

さて、そのいわばキリシタン連作三首とも呼ぶべき歌の筆頭であるが、単純化すれば、キリスト教に対する神道の優位ということになる。「ちぎ」は千木と書き、『広辞苑』第五版には「社殿の屋上、破風の先端が延びて交叉した木」とある。それが高いとは、社殿が堂々と高貴にして、人界の遙か高みに位置するさまを表し、「ちぎ(千木)高き」は、祝詞をはじめ頻出する言い回しである。「八ひろどの」は、『古事記』冒頭の国生み神話に「其の島に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき」とあるように、神の偉大さを象徴する表現である。すなわち、神代より続く日本国を称揚した歌と言えよう。しかし、これを対露主戦論者でもあった湖南の国粹主義精神が顕現したものとするのは、軽率に過ぎよう。むしろ、東洋学者内藤湖南が囑目の景による実感を詠んだものにとらえるべきではなからうか。湖南はこの返信を書いた前年、洋上にいた。大正十三年の七月から翌十四年の二月までの約半年間、欧州へ学術視察のため出張していたのである。帰国してまもなく、湖南は宮内省より東山御文庫(京都御所内の東北隅に位置する皇室の文

庫)の取調掛を囑託される。五月五日付稲葉岩吉宛書簡には、その事情を「東山文庫に關係し宮廷學者の見習中に有之候⁽³⁴⁾」と、苦笑しつつ述べているが、それに続けて、「但し此際に於て可成宮廷より西洋崇拜の空氣を減じ度歐州文化殊に英獨文化低級説を宣傳致居候⁽³⁵⁾」とあるように、半年間の歐州出張は、湖南を西洋文明の前に屈服させるものではなく、逆にむしろ、東洋そして日本文化の優秀さを再確認させるものとなったのである。第一首の須佐之男命、第二首の大丈夫もまた、この意気軒昂ぶりを示すものと言えよう。新村の病臥は、前述の南蛮物出版ラッシュによる疲労の蓄積が主因であり、その南蛮学—キリシタン学は、西洋そのものではなく、日本に到来し受容された西洋を扱う学問である。本体はもちろん、日本であり国語にある。日本第一のキリシタン学者=国語学者新村出に取り付いた病に対し、キリスト教を持ち出しながら、神道には及ばないとその建造物に託して詠むことは、湖南自然流の病魔退散方とでも呼ぶべきものであったろう。

あめにますサンタマリヤまもらなむきりしたん文よますきみをば

(釈：天にまします聖マリヤよ見守ってほしい。キリシタン文書を読まれるあなたを)

第四首、「まもらなむ」は、「目守る」の未然形に他へあつらえ望む終助詞「なむ」が接続した形。「よます」の「す」は尊敬の助動詞である。解釈にも及ばない平明直截な歌であるが、当時の湖南や新村の有り様を考察すると、より深い味わいが滲み出てくる。第三首の解説で述べた『南蠻広記』は大正十四年十月に上梓されたが、その序文に新村は、「湖南博士予の原著『南蠻更紗』を見て、予を清代のいはゆる常州学派なるものに匹せられ、尋いで『南蠻広記』に題簽を賜ひぬ⁽³⁶⁾」と記している。常州学派云々は措くとして、湖南が『南蠻更紗』を一読していたことが、ここでは重要となる。というのも、「本書は大正十五年一月、改訂版を第十八版として発行し、初刊後一年三ヶ月に足らぬ短い期間に、此種の書としては驚くべき多くの愛読者を獲得した⁽³⁷⁾」ものであり、かつ、その冒頭を飾っているのが「雪のサンタマリヤ」と題された随筆なのである。大正七年に発見され、『吉利支丹遺物の研究』⁽³⁸⁾にまとめられたものの中の一つ、半円アーチ形(高さ 45.5cm 幅 22.7cm)で慶長八年六月二十八日と紀年銘のあるキリシタン墓碑⁽³⁹⁾を題材とした、「優艶な情趣のこもる吉利支丹随筆として人々に愛読された名作⁽⁴⁰⁾」である。「雪のサンタマリヤ」の題は、墓碑正面左側に「雪のさんたまりやの祝日」と勒してあることによるもので、極熱八月五日のローマの丘に雪が降り積もったという、聖母の奇跡が元になっている。新村は、その来歴談から自身のローマ来訪時の様子をも振り返って記している⁽⁴¹⁾。この墓碑は、慶長十七年から再び始まった禁教迫害による破壊を逃れ、以後三百年間放置された後、新村によりその碑文が解析され、美しい一文を手向けられて世に広く知られるところとなったわけである。その随筆を読んだ湖南が、聖母マリヤに新村を見守るよう望んだのは、縁起にまつわる後日談とも言えようか。この返信の六日前大正十五年一月十日、京の町は一面の銀世界に包まれた。「降つた降つたたゞ白妙」「十八年來の大雪に」「京都は積雪六寸に及ぶ」と京都日出新聞は見出しで報じている⁽⁴²⁾。湖南の住む高野川東側の田中野神町と、新村の居所加茂川西側の小山中溝町とは、下鴨神社を中心に左右対称をなす地所であった。植物園にまで足を伸ばした日出新聞の記者は、「此處は京も北の端 雪も大分に深い⁽⁴³⁾」と感嘆しているが、湖南・新村両家の庭先や日陰などは、一週日を経ても雪に覆われていたに違いない。大雪の厳寒一月、雪のサンタマリヤに寄せて親友の病

気回復を願う熱い思いが、この歌からは読み取れるのである。

やまとしまに神のみことをつたへけむサビエひじりもきみをもるとふ

(釈：日本国に神のお言葉を伝えたとかいう聖ザビエルもあなたを守るという)

第五首、連作の最終歌である。「みこと」は御言、みことのりの意。「ザビエひじり」は聖フランシスコ・ザビエル⁽⁴⁴⁾。「とふ」は「と言ふ」の約。日本に初めてキリスト教を伝えたザビエルが、日本のキリシタン学創始者新村を庇護するとして湖南の歌は、「けむ」「とふ」という伝聞の語を取り混ぜて、久方の光が神々しく頭上に照り輝く、聖人伝説の画を彷彿とさせる。『吉利支丹遺物の研究』には、前述の墓碑のほか、大正九年新村らにより高槻で発見された遺物についても図版入りで詳述されているが、その第一に配されたのがザビエル聖人画像⁽⁴⁵⁾なのである。湖南においても、これは強く意識されていたに違いない。短歌冒頭の「やまとしま」は、古代よりの日本国の別称「大和島根」と同義で、『日本国語大辞典』には「明石海峡から大和国と河内国との国境にある生駒・金剛山地の連山が島のように望まれるところから特にいう。多く、海から見ていう時に用いられる」として、『万葉集』柿本人麻呂の歌「天ざる鄙の長路ゆ恋ひ来れば明石の門より倭島見ゆ」が引かれている。ザビエルは、インドのゴアを出発して明を經由、四ヶ月後に薩摩の坊津に上陸した。坊津への航路は日明貿易によって頻繁に利用されており、不安や心配に及ぶものではなかったろうが、一週日の海上航行の後、薩摩半島を望んだときに、布教の処女地「やまとしま」へ、万感の思いがこみ上げたろうことは想像に難くない。湖南の用語は、単なる復古調でも、ましてや国粹的でもない。当代随一の国語学者新村出を見舞う短歌に、大和の奇しき言霊の力を宿らせたのである。

新村は、翌昭和二年七月中旬に大阪朝日新聞社の嘱により十日間の「南国巡礼」に旅立った。その紀行文は、二ヶ月後の九月から同紙に十六回連載され、キリシタン学創始者新村出の名は、世間にとって一層親しいものとなったのである。この連載中、新村の心境を如実に表している自作短歌を二首引用し、この項の止めとする。

夢見つゝ十年二十年憧れし天草島にけふ来つるかも
長崎の旅路はうれし異国の藍色古き瀬戸物を得つ

2. 新村出の「養生訓」

内藤湖南の新村出宛書簡には、病気回復を祈念する短歌が記されていた。次項で詳述する新村出の柳田國男宛葉書には、元気回復のため贈られた品への返礼歌が詠まれている。いずれも、新村が自身の体調不良を話題にしたことにより、兩人から心温まる返信が送られてきたものである。しかし、これはたまたまではなく、新村が自らの健康に対して、並々ならぬ配慮をしていた証左なのである。実際、公私ともに深く親しい関係にあった湖南の思い出を記すに際し、「晩学の徒として啓蒙にあづかつたことの少くなかつた私としては、博士からの影響によつて一種の養生保健法を自得して今日の瓦全を得てゐる点についても、亦多大の感謝を払はなければならぬ様に感ずる⁽⁴⁶⁾」とまで述べ、さらには、朝寝をその具体例の一つとして示している。そこで、新村出の養生健康法に関し、内藤湖南と柳田國男との書簡をつなぐインテルメッツォという形で、一項を設けてみたい。

「わたしの「養生訓」⁽⁴⁷⁾」と題した文章の冒頭、新村は「要するに無理をしないで自分の体力、体質をわきまえ、節度を保ってくらしています⁽⁴⁸⁾」と書いている。食に関しては野菜食が中心、酒は適量、夏にビール冬に葡萄酒の湯割り、「バランスと調和を保った、ほんとうに平凡な健康法なのですよ⁽⁴⁹⁾」と記すが、その平凡がもっとも非凡であることは、健康マニアの現代日本人でも身にしみてわかることである。読書や研究、辞書編纂作業も疲れれば中止、招待にも体調不良なら応じず、「健康を保つためのエゴイズム——一種の自由主義といいたいまいしょうか⁽⁵⁰⁾」と続ける新村の、弱きに見せかけた意志の強さには、やはり驚嘆せざるを得ない。そして、「自分の心のまにまに歌をよみます⁽⁵¹⁾」と書き加えている。その意味からも、短歌と新村出とは切っても切れない関係にあるのである。この養生法的一端とも言うべき詠歌には、散歩・散策という楽しみが付随する。「現住の地は、洛北の紫野に極近く、この野辺が私の詩境、いな歌境を養成してくれて、平安朝の麗人とつれだつて夢まぼろしの裡に逍遙しつつ古風な恋をたのしんだ成果に外ならぬのである。四季折々、随意に式部たちや少納言らと現実を超越した妙味の愛をささやきながら、逍遙する楽しさは中々尽きず、おかげで米寿を慶ばれるにもおよんだ次第なのだ⁽⁵²⁾」との語りは、詩的表現と言うよりも、新村の真情を述べたものと見るべきである。その逍遙は、主として紫明通でなされたが、「夏は朝早く曙のころ出かけるが、春さきは午前中、または夕方や月の宵にこの大路を歩く、夜は星と月とに気をとられて、足もとが、とかくおぼつかなくなるので、禅の方に脚下照顧の戒があるが、まさに脚下を照顧しながら歩くようにしている⁽⁵³⁾」とある叙述を見れば、諧謔の味付けもさることながら、それぞれの季節と時間に応じた最適の保健法となっていることに注目しなければならない。寺町通の古書肆逍遙についても、「春の朝に、秋の夕べ、夏の涼み、冬はさておき⁽⁵⁴⁾」と、冬を巧みに避けている。中国は唐代の杜甫がその詩「返照」⁽⁵⁵⁾において、四方のうち東の文字のみ用いなかったのは、安史の乱以降の混乱による八方塞がりの中、帰郷に望みをつなぐものの、未だ言葉には出せない方位であったからだだが、新村の場合、冬はわが身の健康を損なう季節であるがゆえにさらりとかわしたのであった。逍遙もあくまで体調管理下において行われたるものだったのである。

この、新村出の養生法に関する繊細な感覚は、彼を取り巻く人々によっても認識されていたようで、『全集』付随の「月報」から、複数の証言を見出すことができる。以下に引用するのはいずれも後生による新村の思い出であるが、それだけに、強く印象に残っていたものであろう。

「先生は、一見して蒲柳の質だったが、九十歳まで長生きせられた。「強いと誇って、柔道何段とか言って居た教授たちが、皆敢なく若死にして、弱い私が長生きするよ、何といても摂養が第一だ。眠れぬままでも寝て居れば、それは睡眠と同じ効果がある」と睡眠の秘訣を教えられた事もあった⁽⁵⁶⁾」

「素人眼に見たところでは、神戸（引用注：神戸正雄）、佐々木（引用注：佐々木惣一）の両先生は、ガッチリした体軀の持ち主で、新村先生がいちばん弱々しく見えたのであるけれども、柳に風折れなしという気持ちで養生につとめられたせいであろうか、いちばん長生きされたのである。とにかく、晩年の先生は、淡々とした心境で無理をせぬように心掛けて過ごされたようで、いつか「こんなひよわい私が、この年まで生きられたのは、まことに仕合わせで」と、もらされたことがある⁽⁵⁷⁾」

新村出に対し、嵯峨野高等学校初代校長中南忠雄が校歌作詞を依頼したのは、昭和二十九年頃、新村七十九歳のことである。そして、「先月以來再度嵯峨野逍遙をいたし又貴校のふんみ氣にもひたり且又風土史蹟などを大觀いたしなどいたし、校歌試作の高興正に到り腹案やゝ進み、精神氣魄いささか昂張し來りし心地いたしてまゐりましたのでこの神慮ともいふべき契機を捉へて、病間、客を謝絶し一向専念の上、修辭に意を盡くしつゝ構想を完うし、天來の妙趣を綴り申して、各位の御期待に反かざらむやういたしたいと存じてをります⁽⁵⁸⁾」と新村が中南に書き送ったとおり、逍遙後一ヶ月で歌詞は完成を見たのであった。翌々昭和三十一年十一月、文化勲章受賞を受けて行われた校歌発表会において、八十一歳を迎えた新村は、肩掛けと電気ざぶとんを贈られている。時季を得たと言うよりも、老齡への労りと言うよりも、この品は養生法の要となるという意味で、新村その人にこそふさわしい贈り物であった。新村出の処女作にして他に例のない校歌⁽⁵⁹⁾の誕生は、散歩をはじめとした養生法による長寿の賜物なのである。

3. 新村出から柳田國男への短歌

新村出と柳田國男の交流については、菊池暁氏がすでに取り上げ論じているので⁽⁶⁰⁾、ここでは詳述を避け、本稿で取り上げる葉書に関する事柄のみに焦点を絞る。新村は柳田とは「親友⁽⁶¹⁾」を自認する仲であった。また、内藤湖南を含めた三者の関係も親密を極めていたことが、「内藤湖南博士の思出」の、「越前三国船の『韃靼漂流記』を校勘考証して、柳田國男氏や私たちが計画した『甲寅叢書』(大正三年以降)のうちに収めて刊行するつもりで居られたのであつたが、つい其儘に経過してしまつた⁽⁶²⁾」という記述などから見て取れる。これなど、今日では一般的となった学際的研究の端緒ではないかと思われるのである。

新村出は、昭和三年に帝国学士院会員に任じられ、毎年五月開催の例会にもたびたび東上出席しているが、戦後日本学士院と改称されてからも、昭和二十六年、二十八年、三十年と引き続き登院している。「学士院の授賞式が毎年五月に行なわれて、先生はそれに参列するのをたのしみにしておられた。明治ッ子の先生が天皇を迎えて行なわれるこの学界の盛事を、大切に考えておられたのも当然であろう。いつも式の二日ほど前に上京されて、当時岩波書店内に設けられていた広辞苑の編集部に立寄られて半日を過されるならわしであった⁽⁶³⁾」との証言もある。興味深いのは、その出席東上がいずれも柳田國男と対談する機会ともなっていることで、二十八年の際は同宿までしているのである。「つき合いは一高時代にはじまつた⁽⁶⁴⁾」両者、また、「当時から詩歌、新体詩や和歌の創作才能を顕はし、(中略)その作品の抒情詩は、私も愛読した所であつた⁽⁶⁵⁾」と語る新村にとって、柳田との半世紀にわたる友誼は深い語らいをもたらしたことであろう。事実、二人の親密な語らいを示す好例がある。昭和二十四年五月二十九日、奈良女子大において「奈良県とキリシタン文化」と題する講演会が催され、新村とともに柳田國男も講演を行ったが、それに際して両者は、他の同行者とともに奈良市富雄の百楽荘に宿泊した。その翌朝の様子を、新村は「五月三十日(月)六時ころ、柳田氏につづきて起きいづ。鳥の声のはなし、民俗のはなし、語源のはなし。クヒナとヨタカのちがひ。柳田氏は、予が昨年一昨年丹波市にてききしは、むしろヨタカならんといふ。予がその声をまねせしによりて⁽⁶⁶⁾」と、自らの日記に認めている。柳田を前に鳥の鳴き真似をして見せた新村の様子が、眼前浮か

ぶが如しである。柳田は、そんな新村の東上を心待ちにしていたようで、昭和三十一年三月十二日付けの葉書では、「この五月ハ今から八つ目うなぎでも御服用御断行尤も御願はしく候」と記し、滋養強壯剤を勧めてまでして強く上京を望んでいる。このヤツメウナギ、実は柳田自身が半年前から服用していたもので、その十日後二十二日付けの葉書では、「大に元気を出したまふことを念願してヤツメウナギの油（カプセル入）少々御送り申候」と書き、さらには、自身の回数と量を示しながら新村に服用のアドバイスさえ行っている。

この、送り届けられたヤツメウナギの肝油一斗缶！に対する返礼が、件の葉書なのである。では、文面の最後書き加えられた短歌五首について、解説を加える。

夏痩せにきくとふくすり春にもと國男のをぢがむなぎたばせる

（釈：夏痩せに効くという薬、春にも服用をと、柳田國男翁が鰻をくださった）

第一首は、「万葉集」中の著名な歌、大伴家持が詠んだ「夏痩せに良しといふ物ぞ鰻漁り食せ」を踏まえている。ヤツメウナギからの素直な連想だが、「春にもと」という語に諧謔がうかがわれる。もちろん、柳田の愛情と熱意を十分に感じ取ってのことである。なお、初案は「くすり」が「むなぎ」となっており、見せ消ちにしてある。

ものゝふの八十ぢおきなを励ますと八つ目のうなぎたまひけるかも

（釈：齢八十路の老人を励ますとヤツメウナギをくださったのだなあ）

第二首、「もののふの」は「八十」にかかる枕詞である。枕詞は通常訳出はしないが、映像喚起力を有しており、この場合、「おきな」そして「励ます」という語との映りが実にうまい。「もののふの」とは、数が多い意、あるいは武士の射る矢の意を導き出す枕詞なのである。単に「八十」だから「もののふの」と枕詞を冠したのではない。ちなみに、『国歌大観』に拠れば、「もののふのやそ」と続く歌は、「やそうぢがは（宇治川）」が最も多く、その他「やそともものを（伴の男）」「やそのころ（心）」「やそうぢひと（氏人）」「やそをとめら（乙女等）」「やそうぢぶみ（氏文）」「やそうぢ（宇治）山」「やそう（打）つ浪」があるが、八十ぢおきなの例は見えず、国語学者である新村出の、歌人としての創意工夫といってよいものである。

ビタミンゆたかなりとふいざのまむやつめうなぎの肝のくすりを

（釈：ビタミンが豊富であるという。さあ飲もう。ヤツメウナギの肝油の薬を）

第三首、平明にして簡要。二句と三句で切れているが、三句は倒置法によるものである。飲むぞという新村の意気込みが伝わってくる。「ビタミン」とカタカナ外来語を冒頭に置くところは、和歌と言うよりは短歌であり、近代歌人たる証拠でもある。なお、豊富なビタミンは、滋養強壯の他に大きな効果をもたらすことになった。「『広辞苑』その後」と題した記事の中で、新村は「目がわるくなっていけないとの同情から柳田学兄からは、わざわざ八つ目鰻の肝の錠ざいを贈ってくれたのもありがたかった⁽⁶⁷⁾」と記し、刊行に至るまではもちろんのこと、刊行後の修正や増補、誤植の校正という目を酷使する細かな作業がいかに大変なものであるかを告白している。上京を促す利己は転じて目を労る利他となる。柳田が贈ったヤツメウナギの肝油は、新村畢生の大業を成さしむるに一大功を奏したのであった。これも、五十年來の学友ならではのことであろう。

上野山花橘のかをるころさつきなかばのしるし待たなむ

(釈：上野の山の橘花が香る頃、五月中旬の効き目徴候を待っていてほしい)

第四首、上野山は東京都台東区上野恩賜公園のことで、ここに日本学士院があり、毎年五月中旬に、天皇の臨幸を仰いでの上野山賞授賞式と総会が行われる。この年昭和三十一年は五月十二日の開催であった。上野の山は桜の名所で、その桜花に替えて古来より五月を呼び出す橘の花を香らせたのが工夫である。結句「しるし待たなむ」は詳しい語釈を要する。「しるし」は、印・標・徴・著など同源の動詞「しるす」(他の事と紛れることなく、すぐそれと見分けのつく形で表現する意—『岩波古語辞典』)の連用形が名詞化したもの。「ありありと現われ出で、他とまがう余地のないもの」(同前)を表し、この歌においては、ヤツメウナギの肝油服用による効果、すなわち上京が叶い柳田と会場で対面するということである。結びの「なむ」は、他にあつらえ望む意の未然形接続終助詞であり、在京の柳田に待っていてほしいと願っているのである(これが「待ちなむ」となると、新村自身が効果を必ず待とうという強意になる)。なお、小倉百人一首に「小倉山峰のみみち葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ」(貞信公)の歌があり、これは小倉山の紅葉を擬人化して、もう一度(宇多院に続く醍醐帝)の行幸を待っていてほしいと呼びかけたものだが、これに倣って「上野山」に呼びかけた歌とすると、また別の面白みがあるというものである。

あづさ弓春のこゝちのみなぎらばHéroをこひてたらひ舟こがむ

(釈：春爛漫と若き気分がみなぎったなら、ヒーローを求めて盃の舟を漕ぎ出そう)

第五首であり最終歌である。そのためか、思い切った詠みぶりとなっている。初句「あづさ弓」は「春」にかかる枕詞で、弓の縁で「張る・射る・引く」等を導き出すが、この歌のように、「張る」と同音の「春」を導く用法が主で、『国歌大観』中「あづさゆみはる」の歌は約二百首あるが、「あづさ弓遙かに」の用法が散見されるほかは、「あづさ弓春」と詠まれたものばかりである。この春は、文字通りこれから四月仲春へと向かう気候であるとともに、ヤツメウナギの滋養強壯剤がもたらす心身の張り、すなわちかつての青春の気でもあると解した。今回も枕詞の映像喚起力は有効で、弓張りの勢いが「みなぎらば」そして「Héro」をしっかりと捉まえている。その「Héro」と洋語(eにはアクサンテギュが付けられているから、フランス語表記と思われる)を用いたのは近代短歌ならではの、原語そのままの記載は新村の短歌にも他に例を見ない。外来語のカタカナ語表記は頻出するが、ここに原語を用いたのは、西洋の勇士のイメージを強く印象付けたかったからと思われる。その直後に出てくるのが「たらひ舟」である。たらいを水に浮かべ船のかわりにしたものが「たらひ舟」で、それを海(湖)に漕ぎ出そうと言うのだが、これは昔話や民話に代表される民俗学の世界を踏まえたものであろう。すなわち、柳田國男が民俗学者であるからそう詠んだに違いない。実際、柳田はその著『雪国の春』の中で、岩手の水害時に盃舟が幾つか出て来たことを記録している。すると、先ほどの「Héro」が洋、「たらひ舟」が和と、両者の対比が実に鮮やかになる。和魂洋才、和洋折衷の近代日本にふさわしい表現とも言えるだろう。それにしても、第三首での「八十ぢおきな」が最終歌で「たらひ舟こがむ」とは、何と意気軒昂ではないか。なお、民話においてたらい舟が使

われるのには著名な二例がある。佐渡と湖国で、いずれも女が愛する男のもとへ通うため、対岸の常夜灯を頼りに夜の海（湖）をものともせず漕ぎ出すというもの。最後はともに女の執念を恐れた男が灯を消したため、沈水落命してしまうという悲恋譚である。ここで、蛇体となって渡岸し男を執り殺せば道成寺伝説になるから、ひょっとすると、話の祖型というものがこれら民話にも存在していたのかもしれない。この話を踏まえた短歌だとすれば、Héroを恋い慕いたらい舟を漕ぐのは女性となり、女に仮託した詠みぶりとも考えられようが、第一首からの連作でもあり、贈られたヤツメウナギの肝油への感謝をさまざまな詠みぶりで表現したものと解釈し、主語は八十翁新村その人としておく。それにしても、下の句「Héroをこひてたらひ舟こがむ」はあまりにも目覚ましい表現で、学士院登院ならびに柳田と面会のための東上を暗に喩えていることは言うまでもないにしろ、そこには何かしらの故事が踏まえられている可能性がある。後学を待つことにしたい。

この昭和三十一年、年譜によると「五月十二日 東上。次男猛随行。学士院授賞式及び総会に出席。⁽⁶⁸⁾」とある。ヤツメウナギの肝油は見事にその効力を発揮したのであった。しかも、その後昭和三十五年まで毎年、この五月東上は敢行され、在京の学者・知識人らとの交友を深めている。また、西帰の際には、「自分の第三の故郷となす⁽⁶⁹⁾」静岡をしばしば訪れて、父母の眠る臨濟寺へ参り、さらに、昭和三十三年からの三年間は熱海へ立ち寄り、歌人佐佐木信綱を見舞っている。老境の新村にとって、まさに命を燃え上がらせる油となったのである。翌昭和三十六年、八十六歳を迎える年にも、この東上は成るはずであった。ところが、機械文明を制御できない人間の愚行によって、その望みは潰えてしまうことになる。その事実を、年譜の記事をそのまま引用することで、本稿の擱筆としたい。なお、柳田は昭和三十七年八月、米寿祝賀会の二ヶ月後に亡くなっているが、新村はこれにも出席できていない。新村の逝去はそれより五年後の昭和四十二年八月十七日、享年九十二であった。

三月二十七日 京都御苑堺町御門内の黒木の梅を観に一人で出かけ、丸太町交差点で市電下車、安全地帯より人道へ渡る際、オートバイにはねられる。救急車にて日赤救急病院に運ばれ、診察治療を受け、その日のうちに帰宅。臥寝一カ月におよび（以後例年五月の東上もとみやめ、京都外へ遠出することなし）。⁽⁷⁰⁾

おわりに

「日本の民俗学を創立し得たのは、特に欧土の先進学者の所説を祖述したり、適用したりした成果に依つたのではなく、天才的独創に基づいたもの、一に帰納的方法から得た所の探究の結集に因つたのであつた⁽⁷¹⁾」とは、新村出が柳田國男を追憶して記した文章である。内藤湖南については、詳述した通りである。嵯峨野高等学校の前身、嵯峨野高等女学校の初代校長に片岡仁志を推した京大教授西田幾多郎は、東京大学選科（本科より一段低くみられていた）の卒業であるが、その登用についても、新村は「京都文科創立初期の十年間の青春期の元気さの象徴だ⁽⁷²⁾」と語っている。しかし、象牙の塔の番人からすると、いずれもその功績にかかわらず、塔の住人として快く迎えるには抵抗ある存在であったろう。一方の新村は、一高から東大という、学界の中央通りを歩んできた学者である。

その新村が、明治四十年京都帝国大学文科大学開設時のメンバーとなることを快諾したのは、やはり新村の中にも、自由闊達な精神があふれていたからに違いない。加えて、その京大という風土が、歌人としての新村出を育て上げるのに最適であったと言うこともできるのではないか。西田の後継者として、一高・東大から東北大を経て京大に招かれた田辺元、この厳格の二文字を体現したかのような哲学者は、晩年に作家野上弥生子と往復書簡を取り交わし⁽⁷³⁾、高度に純化された恋愛関係の中にあっただが、その心情は短歌によって見事にすくい上げられ、結晶化されているのである。

新村出へ内藤湖南から、新村出から柳田國男へという、偉大なる学者の間で取り交わされた書簡において、相手に対する飾らざる心情を吐露するとき、短歌を詠むという行為がなされていた。その人間精神、「うたごころ」とでも呼ぶべきものについて思いを致すとき、明治時代人あるいは京都学派におけるリリズムとでもいうべき表現を用いたくなる。あまりに大仰であるが、幾分かの実態もまたそこには含まれていると思うのである。

注

- (1) 全15巻(昭和46年2月～48年9月、筑摩書房)。以下『全集』と略記する。加えて、『新村出全集索引』が新村出記念財団により昭和58年3月に刊行されている。
- (2) 「私の歌歴自叙」(昭和29年1月～30年3月)『全集』第13巻p.257。
- (3) 同前p.280。
- (4) 同p.258。
- (5) 本文での年号記載は、時代性を明らかにする意味もあり、元号を用いた。
- (6) 写真1参照。なお、当時の年齢は新村出が八十歳、柳田國男が八十一歳である。
- (7) 写真2参照。なお、当時の年齢は新村出が五十歳、内藤湖南が六十歳である。
- (8) 「新文学史跡雑感」(昭和22年8月)『全集』第12巻p.618。なお、内藤湖南が講師とされたのは、師範学校卒新聞記者の教授任用に文部省が難色を示したからである。
- (9) 「五十年前の回想」(昭和31年11月)『全集』第14巻p.338。柳村とは文学者上田敏(東京師範学校から)、空寛とは哲学者桑木巖翼(第一高等学校から)である。
- (10) 「内藤湖南博士の思出」(昭和9年11月)『全集』第9巻p.55。
- (11) 同前p.58。
- (12) 同p.56。
- (13) 同p.58。
- (14) 同。
- (15) 昭和37年11月、毎日新聞社出版室図書編集部。また、『書と人物』第5巻・学者(昭和53年8月、毎日新聞社)pp.30-31においても、上代の大津大浦から当代の高群逸枝まで70名の一人に、東洋史学者として掲載されている。
- (16) 『書と人』p.70。
- (17) 同前。
- (18) 同。
- (19) 同。
- (20) 消印：満奉天 45.4.30。なお、当時奉天は南満州鉄道附属地として、日本が行政権や警察権を掌握していた。

- (21) 前掲 (10) p.56。
- (22) 昭和 2 年 3 月 2 日付内藤ふさ宛「書簡」『内藤湖南全集』第 14 卷 (昭和 51 年 7 月、筑摩書房)
- (23) 「書簡篇」『全集』第 15 卷 p.408。
- (24) 前掲 (2) p.277。
- (25) それより約四半世紀後の文化年間前後に成立した『江戸いろはかるた』では、「文をやるにも書く手は持たぬ」となっている。
- (26) 『江戸いろは』では「論より証拠」。
- (27) 同「屁をひつて尻つぼめる」。
- (28) 同「律儀者の子沢山」。
- (29) 「京都を愛しつつ」(昭和 39 年 4 月)『全集』第 14 卷 p.219。
- (30) 「春日」(昭和 31 年 4 月)『全集』第 13 卷 p.532。なお、「好きではないが、私も冬に興味を感じないほど野暮ではない」(「京都の冬」(昭和 14 年 12 月)『全集』第 12 卷 p.43)、「底びえのひどい京都の夜は辟易する」(同 p.44) とも記している。
- (31) 「思い出を語る」(昭和 31 年 9・11・12 月)『全集』第 14 卷 p.301。なお、当時の大学は秋入学であり、春入学に変わるのは大正 10 年のことである。
- (32) 「南蠻文学概観」(昭和 3 年 8 月)『全集』第 11 卷 p.324。
- (33) 和田洋一「ぼくにとっての新村先生」『全集』第 12 卷「月報」p.4。
- (34) 「書簡」『内藤湖南全集』第 14 卷 p.567。
- (35) 同前。
- (36) 『全集』第 6 卷 p.181。
- (37) 木水彌三郎「解説」『全集』第 5 卷 p.554。
- (38) 大正 12 年 3 月、京都帝國大學文學部考古學研究報告第 7 冊。
- (39) 写真 3 参照。
- (40) 前掲 (37) p.557。
- (41) 「雪のサンタマリヤ」(大正 12 年 8 月)『全集』第 5 卷 pp.213-220。なお、その冒頭に「私たちは、その命日の美はしい、やさしい名にほだされて、いつも大学の陳列館に立ち並ぶいくつかの墓標の前に来ると、とりわけこの一基に心がひかされるのを常とする」(同 p.213) とあって、単に考古学的興味を抱いたのではないことがわかる。
- (42) 大正 15 年 1 月 10 日夕刊二面。
- (43) 同前。
- (44) 『聖フランシスコ・ザビエ』(幸田成友、昭和 16 年 7 月、創元社) と題された小伝もあることから、字余りを考慮した表現であるとも言えない。
- (45) 「摂津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」(大正 12 年 3 月) 絵画及版画 (一) シャゼール聖人画像『全集』第 6 卷 pp.130-133。
- (46) 前掲 (10) p.58。
- (47) 昭和 30 年 9 月、『全集』第 13 卷。
- (48) 同前 p.372。
- (49) 同 p.373。
- (50) 同。

- (51) 同。
- (52) 前掲 (29) に同じ。
- (53) 前掲 (30) p.533。
- (54) 「寺町筋逍遙遊」(昭和 30 年 2 月)『全集』第 13 卷 p.524。
- (55) 楚王宮北正黄昏 楚王の宮北 正に黄昏
 白帝城西過雨痕 白帝城西 過雨の痕
 返照入江翻石壁 返照 江に入りて 石壁に翻えり
 歸雲擁樹失山村 歸雲 樹を擁して 山村を失す
 衰年病肺惟高枕 衰年 肺を病んで 惟だ枕を高うし
 絶塞愁時早閉門 絶塞 時を愁えて 早く門を閉ざす
 不可久留豺虎亂 久しく豺虎の乱に留まるべからず
 南方實有未招魂 南方 実に未だ招かれざるの魂有り
- (56) 中根正親「思出の記」『全集』第 5 卷「月報」p.5。
- (57) 末川博「新村先生につながる思い出」『全集』第 9 卷「月報」p.3。
- (58) 昭和 29 年 10 月 9 日、中南忠雄宛新村出封書。
- (59) 校歌の作詞としては、他に「吉田幼稚園の歌」があるのみである。これは、京大に隣接し関係も深い吉田神社の宮司と新村との話の中で、引き受けられたものである。
- (60) 「拜啓 新村出様」(2011 年 3 月、国立歴史民俗博物館研究報告第 165 集)、「くことばの聖」ふたり」(2012 年 3 月、横山俊夫編『ことばの力——あらたな文明を求めて』京都大学学術出版会)。
- (61) 「柳田国男氏を悼む」(昭和 37 年 8 月)『全集』第 14 卷 p.553。
- (62) 前掲 (10) p.57。
- (63) 市村宏「追憶」『全集』第 12 卷「月報」p.2。
- (64) 前掲 (61) に同じ。
- (65) 「柳田国男君を追憶して」(昭和 37 年 10 月)『全集』第 14 卷 p.555。
- (66) 「わが養老日記より」(昭和 26 年 3 月)『全集』第 13 卷 p.553。なお、丹波市は現在の奈良県天理である。
- (67) 「『広辞苑』その後」(昭和 31 年 3 月)『全集』第 9 卷 p.207。
- (68) 「年譜」『新村出全集索引』p.533。
- (69) 「静の字」(昭和 35 年 6 月)『全集』第 14 卷 p.133。
- (70) 前掲 (68) p.538。
- (71) 前掲 (65) p.554。
- (72) 前掲 (9) p.339。
- (73) 『田辺元・野上弥生子往復書簡』(2002 年 10 月、岩波書店)。

写真1

柳田國男宛新村出書簡 【成城大学民俗学研究所 所蔵】

昭和三十一年三月二十二日（ハガキ 消印：京都三一・三・二二 宛先：東京都世田谷区成城町三七七

柳田國男様 差出：京都市北区小山中溝町十九 新村出）

昨日ハやつめうなぎの油のおくすり一トカン頂戴いたしありがたう存候

朝昼晩ニ三粒づゝ三回とあれども朝晩ほか食事せず（毎朝十時半起床、十一時朝食）

従て二回にとゞめおく分よろしきとて存候

御懇切多謝深謝 昭和三十一年三月春分後一日

○夏痩せにきくとふくすり春にもと國男のをちがむなぎたばせる

○ものゝふの八十ぢおきなを励ますと八つ目のうなぎたまひけるかも

○ヴィタミンゆたかなりとふいざのまむやつめうなぎの肝のくすりを

○上野山花橘のかをるころさつきなかばのしるし待たなむ

○あづさ弓春のこゝちのみなぎらばHéroをこひてたらひ舟こがむ

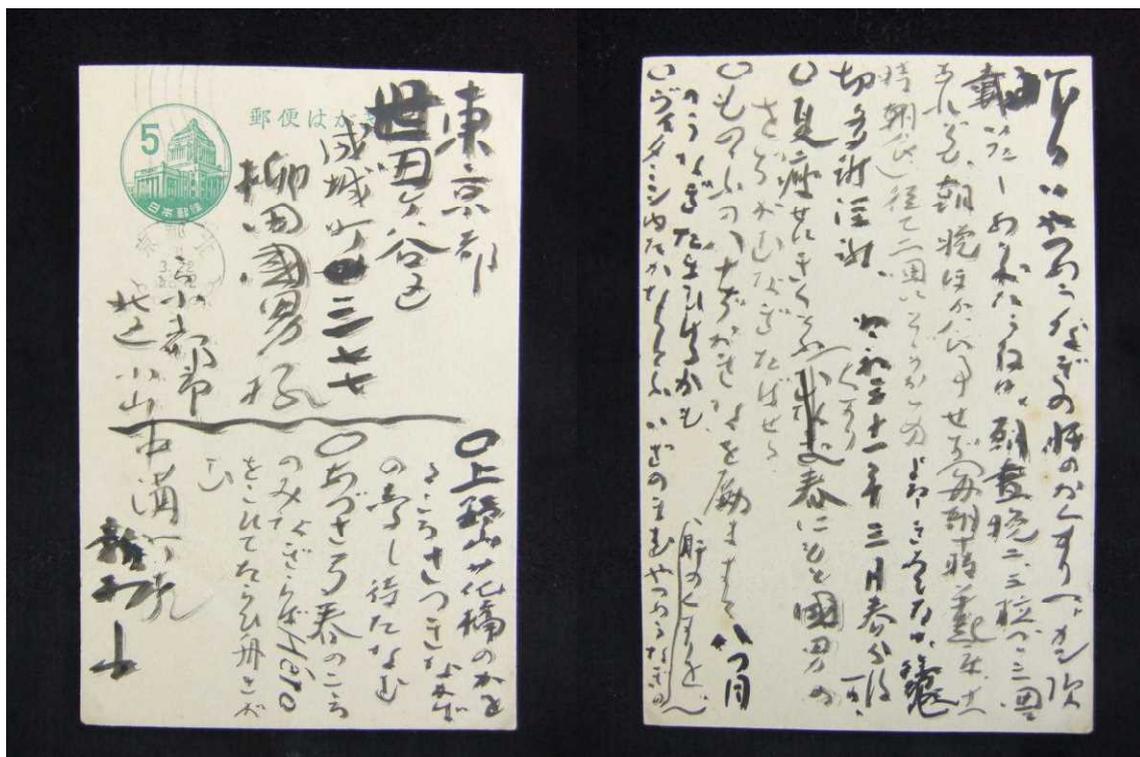


写真2

新村出宛内藤湖南書簡 【新村出記念財団 所蔵】※写真転載は短歌記載部分のみ

大正十五年一月十六日（封書：折紙四枚 消印：判読不能 宛先：京都市小山中溝町一九番 新村出様
差出：市内田中野神町 内藤虎次郎）

新年早々、瓶の原の新室へまかるなど致居候為、御祝詞もおくれ居候処、御病中よりわざわざの御文にて、慚愧之至ニ奉存候。殊に学士院会員仰付られ候事、身に相はぬ榮譽御祝詞を賜わり、恐縮之次第に御座候。旧臘以来御引籠にていまにはかばかしくいたしまさぬよし、折角御養生奉祈上候。新年のいたづらなど御目にとまり、いろいろ御歌をも御示し下され拜誦、それほどの御元気なれば御本復不遠と奉存候。此頃健康の小生には、とんと名歌もうかび不申候へども、御回復の速かならんことを祈上候微衷を表し申し度、つまごめに八重垣つくる北の辺のきみが新室うつくしきかも
くはすとも高楊子かむますらはすきもる風をあにおそれめや
ゴシクぶりのいかしみてらもちき高き八ひろとのにはあにしかめやも
あめにますサンタマリヤまもらなむきりしたん文よますきミをば
やまとしまに神のみことをつたへけむサビエひしりもきみをもるとふ
この出たらめを御読被遊、御わらひニなれば、病魔退散不可有疑候。 あなかしこ、あなかしこ。

一月十六日夜、 虎頓首

重山博士侍史

夫人同覽

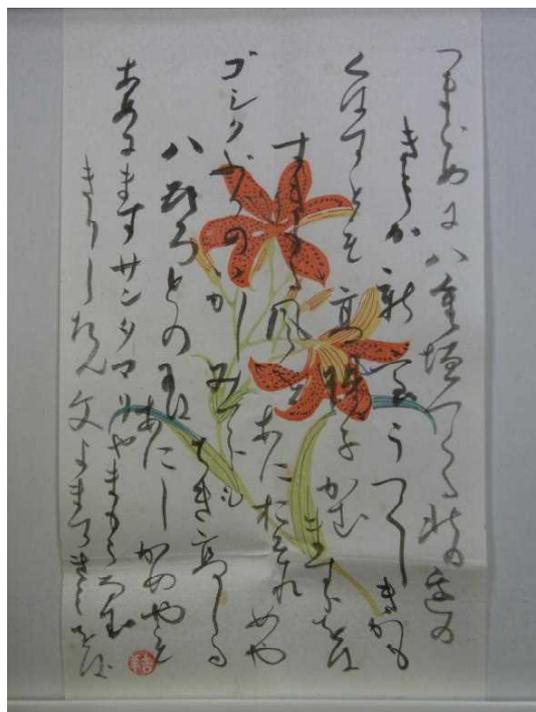
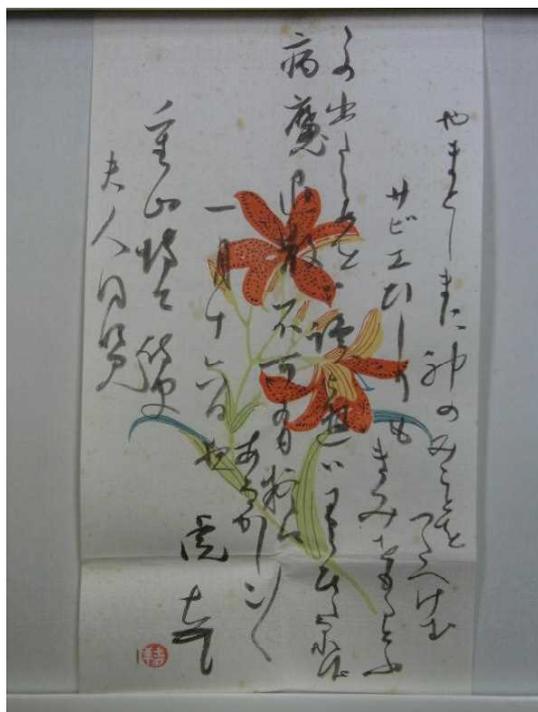


写真3 吉利支丹墓碑 廃浄光寺発見墓碑 【京都大学総合博物館 所蔵】

表面墓碑銘

上部：二支十字と I H S (Iesus Hominum Salvator) の結合

下部右側：慶長八年六月廿八日

中央：■はのはうろ (Paulo)

左側：雪のさんたまりやの祝日

為開基浄光法師追善也 (後刻)

